

地域への愛着を育てる 小学校社会科の地域学習指導のために

相澤 亮太郎

An Essay on Topophilia and Local Area Studies in Elementary School

AIZAWA Ryotaro

Abstract : The primary objective of this paper is to, show the combination of local regional learning and the concept of topophilia. In developing interests and affinity with the local area, topophilia is an important concept proposed by Yi-Fu Tuan in the year of 1974. The author considers that social environment is the essential factor of topophilia. Also to their local community elementary school students should study more about local pioneers.

Key Words : social studies in elementary school, local area studies, topophilia

要旨 : 小論は、小学校社会科における地域学習指導のあり方とトポフィリア論の接続に挑戦する論考である。イーファー・トゥアンによって1974年に提起されたトポフィリア論は、地域への親しみや愛着を論じる上で重要な視点となっている。筆者は、愛着の対象となる場所に、社会的環境を含むと考えている。そのため、小学校社会科においては、場所への愛着を獲得するために、地域の先人についての学習を充実させることが重要である。

キーワード : 小学校社会科, 地域学習, 地域への愛着

1. はじめに

場所への愛着の概念は、1970年代に、地理学者イーファー・トゥアンによって記された『トポフィリア』において論じられたことが広く知られている。トポフィリアは「場所愛着症」という訳語を与えられつつも、「物質的環境への情緒的つながり」という定義がなされ、その後、地理学における場所概念をめぐる議論の端緒の一つとなった。トポフィリアは、開発や災害など、大きな環境変化が生じる度に関心が寄せられ、地域社会における諸実践の動機・心情として重要な役割を果たすものであると認識されている（例えば藤目 2007 や工藤 2015）¹⁾。また近年では、場所の多様性や場所の排他性を論じる上での重要な要素として場所への愛着が果たす役割に注目することもできる（例

えば熊谷 2015）²⁾。

場所への愛着は、居住を続ける中で自然発生的に生じるとは限らない。学校教育の現場においては、教育活動を通じて子どもたちが場所への愛着を培うことが要請されている。社会科教育においては、場所への愛着に通じる「国土と歴史に対する理解と愛情」を培うことが教科の目標の一つとして設定され、そうした「態度」は、社会科教育によって培われる「公民的資質」の一つであるとされている（平成20年度改訂小学校学習指導要領参照）。小論の第3章において詳述するが、こうした心情的側面は、国家主義的イデオロギーに回収されることへの懸念から、批判的に検討されてきた側面もある。

筆者はこれまで、場所への愛着の特性や傾向を探る論考（相澤 2002）や、阪神・淡路大震災後の被災地において地蔵祭祀の復活に取り組む実践には、かつて

の地蔵祭祀の記憶が重要な役割を果たしてきたことを明らかにする研究(相澤 2005)に取り組んできた。また神戸市内の小学校統廃合の事例を取り上げ、校区の過去が、統合後の新たな小学校において、どのような形で継承されるのか、校名、校歌、震災モニュメントの3つに注目し、調査を行った(相澤 2014)。その結果、統合された小学校に愛着を持つ住民に配慮するために、各小学校の過去と差異に配慮しながら、新たな学校作りが進められた過程を明らかにすることができた。こうした研究を通じて、場所への愛着＝「物質的環境への情緒的つながり」の重要性を強く認識してきた一方で、場所への愛着が何に對してどのように培われるのかについては、未だ明確な答えを得ることはできていない。そこで小論では、①イーファー・トゥアンによる場所への愛着に関する論考の限界や関連する議論を整理した上で、②場所への愛着の対象として、社会的環境の要素とも言える「人」を位置づけることができるのかどうかを検討し、③場所への愛着が培われる契機としての小学校社会科における地域学習に着目する研究の今後について展望したい。

2. トポフィリア論の限界

地理学における場所概念をめぐる議論の歴史は長い。1960年代以降、電子計算機の発展により地理学にもたらされた計量革命は、それまで地誌的記述に重きを置いてきた地理学研究に大きな変革をもたらした一方で、空間モデル化を過度に重視する姿勢に対する批判も招いた。1970年代に台頭した人文主義地理学は、「法則ではとらえられない人間の主観を重視し、主体によって生きられた世界や主体による場所(place)の意味づけなどを探究する」取り組みとして展開した(竹中ほか 2009)。トゥアンは、我々の身の回りには意味に満たされた環境があることを主張し、それを場所と呼んだ。人間にとっての物質的環境は実に様々である。自然地形だけでなく、都市、農村、地域、郊外、聖地、観光地、商業地、景観、風景等が、それぞれ物質的環境にあたるものであるとされる。トゥアンは、過度な開発や環境破壊、そして空間モデル化を追究する計量的なアプローチを批判する立場から、意味に満たされた環境こそが場所であると重視し、物質的環境に対する情緒的つながりを「場所愛＝トポフィリア」として質的、記述的に捉えようとした。こうしたアプローチについて、現在では「人間や社会の具体的な場所の経験の重要性を主張する人文主

義地理学」として位置づけられ、その後は、「新たな文化地理学ないしは社会＝文化地理学として総合され、今日活況を呈するにいたっている」と整理されている(大城 2011)。

トゥアンのトポフィリア論は、そもそもどのようなものであり、その後、それらはどのように評価されてきたのか。トゥアンによれば、トポフィリアは、「物質的環境と人間との情緒的なつながりをすべて含むように広く定義できる」ものであり、「はかない喜び」や「啓示的に現れる美的感覚」であり、場合によっては「触覚的」とであるとされる(トゥアン 1992)。トゥアンは、トポフィリアを厳密に定義することを避けているが、その論考においては、時間を経て生じる「親しさ」や「愛国心」に触れた上で、都市、田園、農村、原野等を取り上げ、それらに対する感覚や反応について紹介している。そして、「環境は、トポフィリアの直接的原因ではないかもしれないが、しかし環境は感覚的な刺激をもたらし、それらの刺激は知覚されたイメージとして、われわれの喜びや理想に形を与えるのである」と述べながら、物質的環境としての各地の自然地形に言及した歴史的な文献等を通じて、環境に対する感覚や反応のあり方を捉えようと試みている。

トゥアンが「知覚」「反応」「感覚」という言葉を多用していることから分かるように、トポフィリア＝「物質的環境への情緒的つながり」は、当初、人間と環境の間に自然発生的に生じるものとして想定されていたことが分かる。トゥアン自身も、『トポフィリア』の論考については体系的な整理ができていないことを自ら指摘し、その数年後に著した『空間の経験』においては、経験というキーワードを軸としながら、「環境への情緒的つながり」が生まれる過程や要素についても言及している。第10章「場所の親密な経験」においては、「幼い子供にとって、親はまず第一の『場所』である」「年配の夫婦は場所に愛着をもっているが、しかし同時に、それよりもずっと人間、仕事、そしてお互いに対して愛着をもっている」と述べ、個人的で変わりやすい人間関係や経験といったものが親しみの感情の基盤となり、場所はそうした経験の舞台でもあると位置づけられている。続いて第11章「母国への愛着」においては、神話的・宗教的世界、もしくは民族的な特性として、場所と離れがたい状況があることを紹介している。ただし、なぜ場所と離れがたい感情が生じるのかという点に関しては、神話的世界観や先祖祭祀が「土地に根ざしている」ということを示

唆するばかりで、明示的ではない。

オギュスタン・ベルクは、トゥアンによって著された『空間の経験』の日本語版解説において、「経験のパースペクティブをもっとはっきり構造化するような概念体系はここでは追求されるテーマとはならなかった」と指摘し、理論的側面に関する精緻化が不十分な点については差し引いた上で評価すべきとしている。しかし、トゥアン自身は、『トポフィリア』以降も自らの論考を深め、むしろ近代化する環境を捉える枠組みとして、場所概念を独自に展開させようと試みた。トゥアンは、近代化合理化が進む環境を「空間」と呼び、居心地の良さや安心感をもたらす「場所」と対比させることで、多様な物質的環境の変化を捉えようと試みた。場所と空間の二元論的アプローチは、近代化が進む環境の変化を捉える際には一定の説得力を持ち得るように見えたが、安心感や自由といった感覚的な手がかりに基づいた場所／空間論は、現代の複雑な環境を理解する手立てとしては不確かなものとなってしまふ。そうした枠組み的な限界のためか、トゥアンによるトポフィリアの概念が、現在の地理学において正面から取り上げられることは少なく、乗り越えられた過去の論考であると理解されている。しかし、冒頭に述べたように、トゥアンが注目した「環境への情緒的つながり」という問題意識の重要性は、今なお失われていないと筆者は考える。

場所愛ないしはトポフィリアというキーワードは、地理学以外の研究分野においてもしばしば援用されてきた。例えば、居住地移動によるダメージを把握するために、中山間地に暮らす高齢者が、長年住み慣れた居住地にどのような愛着を有しているのかに関心を寄せる研究（井出ほか 2014）においては、トゥアンの『トポフィリア』が参照された上で、トポフィリア＝場所愛を、医療・介護・福祉サービスの利用者を心情的かつ包括的に理解する手がかりとして位置づけ、質問紙調査を通じて明らかにしようと試みている。そこでは、場所への愛着が数値化し得る対象として扱われ、年齢や生活満足度とのどのように関連しているのかという点に関心が払われ分析がなされている。また景観デザインや土木工学に関する学会において発表された引地ほか（2009）の研究では、「愛着形成の過程」を明らかにするために、物理的環境と社会的環境を区別した上で質問紙調査を行い、地域への愛着を数値化して捉え、物理的、社会的環境が地域への愛着形成にどのような役割を果たしているのかについて、見解を示している。こうした研究において共通しているの

は、場所への愛着が数値化し得るものとして扱われている点と、愛着の対象としての地域が先ず的に設定されている点である。

これらの研究は、場所への愛着の役割を考える上で大変興味深い示唆を与えてくれる一方で、トゥアンによるトポフィリア論との異同を注意深く検討する必要がある。引地ほかによる地域への愛着形成に関する研究においては、物理的環境と社会的環境が明確に区分されているが、トゥアンの『トポフィリア』においては、トポフィリアの定義を「物質的環境への情緒的つながり」としたため、愛着の対象としての社会的環境は強調されていない。しかし、『トポフィリア』及び『空間の経験』において、しばしば愛着の対象となる家族や身近な人びとに言及しており、それらを排除する意図を見いだすこともできない。近年の地理学研究においては、例えばアンリ・ルフェーブルによる空間の生産論等、資本の運動や政治権力、人びとの諸実践を通じて、物質的環境や社会的環境が相互に再生産される状況に関心を寄せるアプローチが広く受け入れられているが、場所への愛着の対象として物質的環境だけを取り上げることに限界があると筆者は考えている。そこで次章では、地域への愛着や親しみを形成することが意図されている教育的実践を主に取り上げながら、そこで愛着の対象としての社会的環境＝「人」がどのように取り扱われてきたのかについて確認する。

3. 地域学習の対象としての「人」

教育的実践を通じて地域への愛着を形成することに関する研究は多岐にわたるが、ここでは「郷土」という観点から展開された研究に注目したい。「郷土」の構築性に関心を寄せる地理学者らが執筆した『郷土－表象と実践－』（「郷土」研究会 2003）は、数多くの題材から、郷土概念がどのように構築されてきたのかについて明らかにしたものである。著者の一人である福田は、アメリカにある歴史博物館に展示された肖像画に着目し、それを「郷土」を象徴する地域表象の一つであると位置づけた。そこでは、「私たちとは誰か」という問いに答える形で、白人男性の肖像画が数多く掲げられており、先住民に関する科学的知識の展示と対比すれば、私たち／彼らという構図が明確に見いだされることを指摘している（福田 2003）。郷土意識の醸成には、有名無名の人物顕彰が取り入れられてきたことは言うまでもないが（例えば矢野 2006）、そうし

た指摘をふまえれば、我が国の学校教育で取り扱われる地域学習の内容や、愛着の対象となる「地域」の構成に注目する際にも、その構築性や政治性、そして「誰を」「どのように」学ぶのかという点に注目する必要があると言える。

社会科教育における「郷土」や「郷土学習」という言葉は、心情的な意味を持つために不適切であるとされ、昭和 43・44 年度学習指導要領以降、「地域」「身近な地域」「地域社会」という言葉に置き換えられている(森分・片上 2000)。しかし、現在の学習指導要領に沿った「地域学習」においても、先人の功績等を通じて地域の歴史や特徴を学ぶこととされており、先人の苦労や喜びを理解し共感するという観点は、社会科学学習の重要な学習課題である³⁾。

小学校社会科の歴史分野における人物学習に関する議論を整理した吉田(2003)によれば、人物学習をめぐる議論の論点も、「誰を」「どのように」学習するのが望ましいのかという点に集約される。特に、人物学習が子どもたちへの「価値注入」の手段となるか否かという点に大きな注意が払われるため、人物への理解にとどまるのではなく、学習者である子どもたちによる問題解決的・意思決定的な要素を持つ授業展開が望ましいとされている。吉田の整理は歴史分野における人物学習を前提としているが、地域学習の分野においても「価値注入」の問題は同様に留意する必要がある、「誰を」「どのように」学習するのかについて、丁寧な検討が求められると言える。

人物学習における「価値注入」的側面が懸念される一方で、人物学習によって、学習者がロールモデルを獲得するという側面に注目することもできる。地域学習が、中学生の進路選択への強い影響を与えた事例として、竹内(1997)が報告している通り、身近な地域の人物や地域作りの活動に関わる地域学習が、地域への愛着や進路選択に強い影響を与えることがある。地域で活躍した人物の功績に触れる取り組みは、ドロレス・ハイデン(2002)の『場所の力』において、その成果が示されている。ハイデンは、自らが関わるロサンゼルスにおける黒人女性助産師の顕彰活動を通じて、地域に暮らす黒人や女性といった被抑圧的な属性を持つ人びとを力づけている実践を紹介している。都心部の公園に設置された顕彰のモニュメント等を通じて、人びとが勇気づけられることを企図したハイデンの実践が、過去の「社会的環境」が場所に埋め込まれたことによって成り立つことのものであると理解するならば、愛着や親しみの対象となる場所は、物質的環境

であると同時に社会的環境として扱い得ると言える。トゥアンが愛着の対象として注目した物質的環境のあり方にも、社会的環境が埋め込まれている状況が多く見られる。そして、こうした社会－空間－文化的な諸実践は、学校教育の実践との共通点を多く見いだすことができるのである。

以上、ごく限られた材料を取り上げたに過ぎないが、自らが暮らす地域の人に関わり、人について学ぶことを通じて、自らが「誰」であるのかというアイデンティティの構築や、地域への愛着、誇り、地域との離れがたさ等の「情緒的つながり」を形成することは明らかである。それは、トゥアンが「情緒的つながり」の対象とした物質的環境に限らない、社会的環境が場所への愛着の対象となり得ることを示しているのである。

4. 小学校社会科における 地域の「人」への関わり

ここまで、場所への愛着を論じる際に参照されるトポフィリア論の限界について述べた上で、愛着の対象として物質的環境だけを取り上げるのではなく、社会的環境を含めた「場所」を愛着の対象化することの意義について述べてきた。それでは実際に、小学校現場において地域に関わる学習活動を行う際、「人」への関わりはどのように設定されているのだろうか。小学校社会科において、身近な地域を対象とした学習活動は主に 3, 4 年生に設定されている。兵庫県神戸市内の小学校において地域学習教材として利用されている社会科副読本を事例に、その手がかりを確認してみたい。社会科副読本『わたしたちの神戸 3・4 年生』の章構成は以下の通りである。

『わたしたちの神戸 3・4 年』1961 年(昭和 36 年)初版、2016 年(平成 28 年)改訂発行(監修 神戸市教育委員会事務局 編集 神戸市教育委員会社会科部 協力 神戸市教育委員会図工部)

目次

1 わたしたちの町と神戸市

(1) わたしたちの町・新発見

(2) わたしたちの神戸

2 はたらく人びととわたしたちのくらし

3 人びとのくらしのうつりかわり

(1) 昔のくらし

(2) 今にのこる昔

4 健康でゆたかなくらし

(1) 暮らしとごみ

(2) 暮らしと水

5 安全で安心な暮らし

(1) なくそうおそろしい火事

(2) ふせごう交通事故

6 神戸の発展につくした人びと

(1) つけかえられた川

(2) つくられた運河

(3) 広がる港

7 わたしたちの兵庫県

小学校3・4年生の社会科学習では、子どもたちが暮らす身近な地域を取り上げて、社会の仕組みや地域の特徴を学ぶ。学習指導要領においては、「(1) 地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする。(2) 地域の地理的環境、人びとの生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。(3) 地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。」という3つの目標が設定されている。教科書には自地域の事例が取り上げられているわけではないため、多くの自治体において社会科副読本が作成され、教材として提供されている。兵庫県神戸市は市域が広大であるため、より身近な地域スケールに対応できるよう、必要に応じて、それぞれ複数の地域や施設、行事等が取り上げられている。実際に神戸市の社会科副読本に複数例示されている内容は以下の通りである。

3 (1) において例示された「昔の暮らし」の展示施設：神戸ワイナリー農業公園民具農具館、神戸市埋蔵文化財センター、箱木家住宅（千年家）、神戸深江生活文化史料館

3 (2) において例示された「地域の人びとが受け継いでいる年中行事や文化財」：十日えびす大祭、海神社のまつり、岩岡神社の秋まつり、六條八幡宮の流鏑馬神事、だんじりまつり、熊野神社獅子舞神楽、長田神社の追儺式、農村歌舞伎舞台

6 (1) 生田川／湊川 (2) 兵庫運河 (3) ①突堤と防波堤②コンテナとふとう③人工島とニュータウン（トピックコーナーとして神戸空港と医療産業都市づくり、スーパーコンピュータ「京」）

【神戸に「ゆかりのある人物」を研究しよう】

網屋吉兵衛、呉錦堂、A. H. グルーム、間人たね、高田屋嘉兵衛、松方幸次郎、小泉八雲、寺島ノブへ、滝川昇三、東山魁夷、小磯良平、池長猛、川西英、淀川長治、アーネスト・ウィリアムス・ジェームス、賀川豊彦、竹中郁

7 (2) 特色ある地域の人びとのからし

コウノトリも住める町・豊岡市／島のよさを生かして・淡路島／焼き物づくりがさかんな町・篠山市今田町
地域学習において「人」を対象とした活動の機会には、「6 神戸の発展につくした人びと」を中心に展開されることが分かる。また神戸にゆかりのある人物として17名が取り上げられており、探究的学習を行う手がかりとして示されている。

歴史的な内容を扱う学習活動としては、他に「3 人びとのからしのうつりかわり (1) 昔のからし」という単元が設定され、多くの小学校では、「昔のからし」展示施設の見学に取り組んでいる。展示施設の一つである神戸深江生活文化史料館（神戸市東灘区深江）では、この5年間（2010～2015年）においても、毎年20校程度の見学を安定的に受け入れている（神戸深江生活文化史料館による機関誌「生活文化史」39～44号参照）。2016年8月に筆者が史料館を訪れ、小学校からの見学に関して職員の方に尋ねたところ、見学の対象となるのは「昔のからし」を再現した限られたコーナーとなっており、地域の歴史や特徴を学ぶような学習としては史料館が活用されていないとのことであった。

小学校中学年の地域学習単元においては、見学活動を伴う学習活動が可能な部分が多々あるものの、先人の功績を学ぶ単元以外では、地域の「人」を学習対象とする機会は多くないことが推測できる。これらの社会科副読本や地域の資料館等を活用した学習活動の実際については、今後さらに調査を進める予定であるが、身近な地域の「人」を学習対象とする活動は、学習指導要領の制約を強く受けるため、限定的な内容とならざるを得ない。

5. 結 論

トッアンはトポフィリアを「物質的環境への情緒的つながり」とであると定義をしたものの、その論考においては、「人」を含む社会的環境も場所への愛着や親しさを感じる対象として取り上げられてきたことについて、2章において提示することができた。現代の地

理学における議論をふまえれば、社会的環境としての「人」は、場所への愛着の対象となり得ると同時に、場所を構築する実践の主体でもある。また3章で示したように、教育現場における学習対象としての「人」は、大きな影響力を持つことが認識されてきた故に、価値注入的な学習を避けることが留意されてきた。しかし、地域の大人から学ぶことで子どもたちが自らのロールモデルを獲得し、進路選択の手がかりとする事例や、先人の顕彰活動を通じて人々を勇気づけるような活動が評価される事例があることを考慮すると、地域への愛着の対象として「人」が位置づけられることを過小評価することはできない。4章では、兵庫県神戸市の小学校社会科副読本をごくわずかに紹介したに過ぎないが、地域学習活動において、「人」が対象となる学習は限定的である。歴史学習においては「人を通じて学ぶ」ことが重要であるとされる一方で、地域学習において、そうした条件を整えることにはさまざまな制約や困難があることが予想される。今後、「人」に関わり、「人」を対象とする地域学習の実践に着目しながら、地域への親しみや愛着を生み出す地域学習や災害学習等のあり方を考える手がかりとしたい。同時に、場所を構築する実践の主体であると同時に、身近な地域への愛着や親しみを感じる対象・要素としての社会的環境としての「人」を捉えるための枠組みを精緻化する必要があると考えている。

注

- 1) 工藤 (2015) は、ジョン・アーリ (2003) が指摘するような、観光地が消費されるだけの存在にならないようにするためには、トポフィリアが形成されるようなプログラムが重要であると指摘している。ただし、こうした研究において参照されるトポフィリア概念には、その構築性や政治性に意識を向けられることはほとんどない。
- 2) 熊谷 (2015) は、グローバリゼーションが展開する社会空間における新たな男性性の諸相 (草食系男子・オタク・ネトウヨ) に着目し、それらがホーム=居場所の包摂性や排他性に与える影響について示唆している。
- 3) 小原 (1982) は、「地域に根ざす社会科」として、主に追体験型の授業を取り上げて分析している。

文 献

- 相澤亮太郎「神戸をめぐる場所への愛着－ライフヒストリーとエッセイからの場所愛抽出－」兵庫地理第47号, pp.23-32, 2002年
- 相澤亮太郎「阪神淡路大震災被災地における地藏祭祀－場所の構築と記憶－」人文地理 57-4, pp.62-75, 2005年
- 相澤亮太郎「学校統廃合と地域社会－校名, 校歌, 震災

- モニュメントに着目して－」甲南女子大学研究紀要第50号 人間科学編, pp.1-6, 2014年
- アンリ・ルフェーブル (齊藤日出治訳)『空間の生産』青木書店, 2000年
- イーファ・トゥアン (小野有五・阿部一共訳)『トポフィリア－人間と環境－』せりか書房, 1992年 Yi-Fu Tuan. TOPOPHILIA: A study of Environmental Perception, Attitudes, and Values, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey, 1974.
- イーファ・トゥアン (山本浩訳)『空間の経験－身体から都市へ－』筑摩書房, 1988年 Yi-Fu Tuan, Space and Place: The Perspective of Experience, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1977
- 井出政芳・山本玲子・宇野智江・鈴木祥子・伊藤優子・早川富博・加藤憲・天野寛・宮治真「中山間地に住まう高齢者のトポフィリア=場所愛についての分析」日本農村医学会雑誌 62 巻 5 号, pp.726-744, 2014年
- 大城直樹「空間から場所へ」吉原直樹・齊藤日出治編『モダニティと空間の物語－社会学のフロンティア－』東信堂, pp.121-151, 2011年
- 「郷土」研究会編『郷土－表象と実践－』嵯峨野書院, 2003年
- 工藤純也「復興応援バスツアーにみる被災地での観光のあり方に関する考察－『消費される観光地』を回避するためには－」総合政策 14-1, pp.1-19, 2015年
- 熊谷圭知「現代日本の社会経済変化と男性／性の変容をめぐる試論－『場所』と『ホーム』の視点から－」ジェンダー研究 (お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報), 第18号, 2015年
- 神戸市教育委員会『わたしたちの神戸 3・4年』1961年 (昭和36年) 初版, 2016年 (平成28年) 改訂発行
- 神戸深江生活文化史料館「生活文化史」39-44号, 2011-2016年
- 小原友行「『地域に根ざす社会科』の授業構成－若狭・安井・鈴木実践の分析－」社会科研究 (30), 全国社会科教育, pp.148-158, 1982年
- ジョン・アーリ (吉原直樹・大澤善信監訳)『場所を消費する』法政大学出版局, 2003年
- 竹内裕一「進路選択過程における地域学習の意味－千葉県三芳中学校卒業生の追跡調査を通して－」新地理 45-3, pp.1-18, 1997年
- 竹中克行・大城直樹・梶田真・山村亜希編『人文地理学』ミネルヴァ書房, 2009年
- ドロレス・ハイデン『場所の力－パブリック・ヒストリーとしての都市景観－』学芸出版社, 2002年
- 引地博之・青木俊明・大淵憲一「地域に対する愛着の形成機構－物理的環境と社会的環境の影響－」土木学会論文集 D 65(2), pp.101-110, 2009年
- 福田珠己「地域の展示と『私たち』の生成」, 「郷土」研究会編『郷土－表象と実践－』嵯峨野書院, pp.68-86, 2003年
- 藤目節夫「『小さな自治』へのアプローチ－地理学の貢献を考える－」E-journal GEO vol.2-3, pp.132-138, 2007年
- 文部科学省「平成20年度改訂 小学校学習指導要領 第

2 章第 2 節 社会」

森分孝治・片上宗二編『社会科 重要用語 300 の基礎知識』明治図書, 2000 年
矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館, 2006

年

吉田正生「新しい『人物学習』の構想－制度・しくみを構想する力を育成するために－」社会科研究 第 58 号, pp.1-10, 2003 年